

## 集うことの幸せ

看護福祉学部  
看護学科

講師 西村 歌織



高校までは小樽で過ごし、訳あって弘前大の医療技術短大へ進みました。初めは街ゆく人の言葉が聞き取れず海外留学のような思いで入学しました。心細さに高校時代の吹奏楽部の先輩を訪ね、オーケストラに所属していると聞き私も早速入団しました。トロンボーンを吹きたかったのですが女性にオケの管楽器は無



初めてナースキャップをつけた日。涙が目が腫れていません(左が私)

## 学問の自由と自由に対する責任

心理科学部  
言語聴覚療法学科

准教授 榎原 健一



音楽や文学に熱中した、わりに自由気儘な高校3年間を経て、入学した京大理学部は、想像以上の自由なところだった。そもそも京大では、学生は1年生と呼ばず1回生と呼ぶ。学年と言う概念自体がナンセンスとされてたからだろう。理学部は卒業単位全部取得しても、申請しなければ卒業しなくて良い。卒業単位を全部取得して満を持して休学、海外放浪なんてことも可能。ただこの制度は、うっかり卒業申請を忘れて卒業出来なくなるということをも意味する。また、在学中の学科も専攻も卒業申請時に決定される。例えば、卒業時に数学系の科目の取得単位数が一番多ければ、「数学系」卒となる。

怠惰な僕は1回生時に週に6コマ位しか出席しなかったが、手続き上2年目にしか取れない語学と体育の単位を除いて、教養での単位

理と言われ(酷い差別です)、ピアノを弾くことになりました。週4回の合奏とパート練習でしたので、臨床実習が終わると図書館で一気に記録を書き18時からの練習に直行していました。合奏がない日も、「チェロ小屋」と呼ばれる借家に個人練習と称して何となく集まっていた。その流れで誰かの家に何となく集まっては朝を迎える日々で、ほとんど自分の家にいた記憶がありません。家にいて

も早朝から「ドライブいかあ?」と先輩が窓の外に立っていたりで、異国の地でも寂しさを感じることがありませんでした。そして集うことの楽しさと自由の有難さを学んだように思います。お陰でピアノはそこそこ弾けるようになりました。

一応看護学生でしたが、そちらは身が入っていませんでした。二日酔いの具合の悪さに先生に休憩室で休んでなさいと言われたこともあり。その先生は何と実践基礎看護学の平先生でした(すみませ



先輩宅で夕食(左から3番目が私)

ん)。先生はこんな私でも、カンファレンスのプレゼン準備を本気ですると、「これ研究になるよ!西村さんってやろうと思うとできる人なのね」と言ってくれました。密かに今もそれを励みにしています。

振り返ると、看護者としての適性も大事かもしれないませんが、人との交流からの学びが看護者としての人生に生きています。私は今も看護者として、そして人として、がん経験者の方々と集いイベントを企画しながら、社会的な交流の意味やそれが阻害されることの意味を考えています。学生の皆さんにもぜひ人とのつながりを大切にして、あらゆる経験を積んでいって欲しいです。

## 私の学生時代

今、本学の教壇に立たれている先生たちは、学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。今回は西村講師と榎原准教授のお二人に、当時の様子を語っていただきました。

をすべて取った。2回生になると、3、4回生担当の数学教室の専門科目の単位もそれなりに取ったが、上には上が居て、同じ年に入学したK君などは、2回生の時に卒業に必要な単位を全部揃えてしまい、3年から休学して9月に米国の大学院に入学してしまった。彼はそれから2年で博士号を取ったので、書類上は大学卒業後、半年で博士になっている筈である。飛び級も何も許されていない時代に、何故かこういう異例が許されていた。

学部では学生は教員を“さん”づけて呼ぶ不文律があった。ノーベル賞受賞者を多数輩出している京大理学部では、ノーベル賞を取る可能性がある学生が、ノーベル賞を取っていない教授を“先生”と呼ぶ必要はないと云うことだった。僕のいた数学教室の教員は、お互いに“さん”

“君”で呼び合い、教室内では教員はネクタイをしないと申し合せていた。学びたければ学ぶことを妨げるものは何も無い、学びたくなければ学ばずとも良いが責任は自分で取れ、と云う自由な学生生活は、師匠の亡き丸山正樹教授が言っていた様に、優秀な学生には理想的だが、落ちこぼれには、これほど苛酷なシステムは無い。

大学での自由な学生生活が人格形成に影響したのか、そもそもそう云う人間だったからそう云う大学に行ったのかは不明であるが、とは言え大学から大学院まで通った京大の校風が、僕の性分と一致していたのは、幸運な選択だったと今でも思う。

